

第2章 言語活動の充実を通じた協働的・双方向的な学びの場をつくる工夫

第1節 小学校 国語科

1 基本的な考え方

(1) 国語科における協働的・双方向的な学び

国語科における協働的・双方向的な学びについて考える際、小学校学習指導要領（以下「指導要領」という。）に示された国語科の目標との関連を意識する必要がある。指導要領の教科目標には「伝え合う力を高める」という文言が見られる。これは、小・中・高等学校のいずれの校種においても国語科の目標として位置付けられており、国語科全体を通して重要視されているといえる。指導要領解説国語編には、「伝え合う力」とは、「人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言葉を通して適切に表現したり正確に理解したりする力」であると示されている。この「人間と人間との関係の中」で言葉の学びを展開するためには、知識を教えるだけの国語科学習だけでなく、主体的な思考、判断を促す言語活動を重視した国語科学習へと改善していくことが大切である。従って、協働的・双方向的な学びを取り入れることは、「伝え合う力を高める」という教科目標を達成するために有効な授業方法の一つであると考えられる。

今回のプロジェクトでは、研究の柱の一つとして、言語活動の充実が挙げられている。言語活動の充実は、平成20年度の指導要領改訂において、国語科のみならず、各教科等を貫く重要な改善の視点である。国語科は、教科目標を達成するために、言語活動を通して指導事項を指導する教科である。しかし、国語科における言語活動の充実を考える場合、指導の目標と手立ての両方において「言語」が扱われていることが、指導の曖昧さを生んでいるといえる。国語科における言語活動を充実させるためには、指導する「言語」に目標と手立てという二つの意味があることを認識した上で実践を進める必要がある。実際の指導では、単元で付けたい力を明確にし、それらを確実に身に付けられるような言語活動を選択することが重要である。その際、国語科の目指す方向を鑑み、児童自らが活発に思考・判断・表現することのできる言語活動を工夫することが大切になる。

指導要領の改訂以来、国語科においても言語活動の充実を目指した授業改善には、多岐にわたって取り組まれているが、同時に課題も明らかになっている。指導のねらいと言語活動との関係が曖昧で当該単元で付けたい力を確実に身に付けられたかが不明確であることや、指導に時間がかかったり指導のポイントがつかみにくかったりすることより、言語活動を取り入れること自体を躊躇（ちゅうちゆ）してしまう場合があること、学習評価との関係をどうとらえるかが不明確なまま指導がなされる場合があることなどである。

以上の課題も踏まえ、本研究では、言語活動の充実を実践の土台として、協働的・双方向的な学びを効果的に取り入れることで、児童の学習意欲がどのように向上するかを検証していく。また、指導の具体として、実践を通じた国語科の授業モデルも示していきたい。

(2) 研究目的

「付けたい力に最適な言語活動を選択し、協働的・双方向的な学びを単元構想の中に意図的・計画的に位置付けた授業を展開することで、児童の学習意欲は上がる。」という仮説を立て、国語科の授業実践を通じた児童の学習意欲の高まりを検証する。

(3) 研究方法

ア 研究期間 平成26年5月～12月

イ 研究対象 生駒市立あすか野小学校 第3学年3組 児童35名

ウ 研究内容

- 協働的・双方向的な学びを取り入れた国語科の授業実践及び考察
- 主体的・能動的な力等の変容を見取るための質問紙調査の実施と分析

2 協働的・双方向的な学びを取り入れた授業実践

(1) 実践前の対象児童の実態

本学級の児童は、学習活動全般に意欲的な児童が多い。授業中も、積極的に挙手して発言する姿が見られた。授業は、基本的に教師主導で進められていたが、学習内容によっては、ペア学習やグループ学習も取り入れており、友達同士で学び合う活動には抵抗なく取り組んでいた（図1）。しかし、組替え直後であったため、既知の児童と話す傾向が強く、積極的に意見を出せない児童も複数見られた。また、グループ活動の際には、一人一人が意見を述べるだけに留まったり、他のメンバーの意見を生かすことなく、自分一人で課題を処理してしまったりする様子も見られた。



図1 ペア学習の様子

児童の学習意欲の向上を測るために、34項目からなる質問紙調査を5月に実施した。その内、「とてもそう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせた回答（以下「肯定的な回答」という。）の割合について整理したところ、「国語の勉強は好きだ。」は74.2%、「国語の勉強は大切だ。」は80.0%と他の質問項目に比して高い数値であった。ところが、「勉強のことは、友達から頼られていると思う。」が40.0%、「自分のすることや言うことに自信をもっている。」が65.7%、「学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しい（逆転項目）」が45.8%で、他の質問項目と比較して肯定的な回答をした割合が小さかった。児童の自己有用感や発言することへの自信、言葉で説明する能力等の育成に課題があると言え、研究を進める上で意識するポイントとした。

(2) 実践の内容

ア 協働的・双方向的な学びを充実させる工夫

国語科は、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域と「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の1事項によって構成されている。協働的・双方向的な学びを充実させるにあたり、どの領域・事項の指導においても意識したいことを「学習形態の工夫」「単元構想の工夫」「学びを成立させる言語環境の工夫」の三つの視点から整理した。

(7) 学習形態の工夫

協働的・双方向的な学びを充実させるためには、単元構想を立てる際に、学習活動に適した形態を選択することが大切である。そこで、ペアやグループといった学習形態には、それぞれどのような特徴があるのかを整理してみた。ペア学習は、児童に何度も反復させて習熟を図りたい場合や客観的な視点を取り入れた確認作業をしたい場合などに有効であると考えられる。また、ペア学習は、グループ学習へのプロセスとして自分の意見を確立させるためにも使うことができる。一方、グループ学習では、学習の目指している方向が合意形成なのか相互理解なのかによって形態に変化が出ることが予想される。互いに意見を述べ合いながら折り合いをつけて一つにまとめていくような学習には、3～4人ぐらいが、また、多様な意見を交流することで考えを広めたり深めたりするような学習には、6～8人ぐらいの人数を設定することが望ましいと考える。

次に、学習に適した形態や具体的な人数が決まると、グループをまとめるリーダーを立てたり、個人の学力や性格を配慮したりといった構成メンバーの工夫が必要となる。例えば、自分の意見を積極的に発言できる児童を中心にグループのメンバーを構成してしまうと、その児童の意見が優先されてしまう場合が多い。そこで積極的に発言できる児童同士でグループを構成することで、意見を言い合える状況にしたり、逆に発言に消極的な児童同士を同じグループにすることで、誰かが意見を言わなければ学習が進まないような状況をつくったりして工夫をする。

さらに、今回の実践では、予め学習形態を児童に知らせるための工夫として新しい試みを行った。計画した学習形態をスムーズに実践するためには、教員だけでなく児童自らがどのような学習形態で学ぶのかを認識しておくことが有効であると考えた。そこで、児童に本時の学習形態を的確に知らせるために「視覚支援カード」(図2)を提示することにした。「視覚支援カード」とは、学習形態をイラストで図示したA4版のカードである。カードは、①一人学習、②二人学習(机が前向き)、③二人学習(机が向かい合わせ)、④班学習、⑤みんな学習の5種類を作り、授業の中で学習形態を示す際に活用することとした。



図2 視覚支援カード(班学習)

(イ) 単元構想の工夫

単元の構想を組み立てる場合にも、いくつかの工夫が考えられる。

まず、協働的・双方向的な学びと付けたい力との関連を明らかにすることである。国語科は、言語活動を通して指導事項を指導する教科である。指導事項、つまり教科で付けたい言語能力を確実に身に付けるために、最適な言語活動を選択することが重要になる。付けたい力が付いたかどうかは、学習の前後で児童に有益な変容が起こったかどうかを指標とする。この変容をより大きくするために協働的・双方向的な学びを取り入れることを教員が明確に意識しなければならない。形式的にペアやグループを作って学習しても付けたい力が付くというわけではない。学習内容によっては、一人で学んだ方が付けたい力が付く場合も考えられる。教員は、本単元で付けたい力を明確にし、それを確実に付けるためにどのような言語活動をどのような学習形態で行うことが効果的であるかを考え、単元を構想していくことが大切である。

その上で、教員は、単元構想の中でいつ協働的・双方向的な学びを取り入れるかを明確にしておくことが必要である。さらに、児童にも学習形態の計画を示し、見通しをもたせて学習を進めることが学習意欲を高める上で大切である。見通しをもたせる手立ての一つとして、今回の実践では、学習計画表(図3)を掲示することにした。学習計画表は、単元の学習内容と言語活動を1枚の表にまとめたもので、「二人学習」「班学習(人数)」といった各時間における学習形態も明示した。各学習時間の初めに、この学習計画表を使って学習のめあてと内容を押さえることで、児童が学習に対して主体的に向き合えるよう支援したいと考えた。

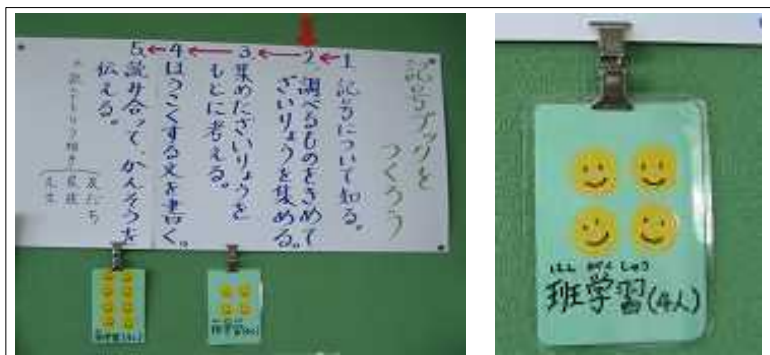


図3 学習計画表

(ウ) 学びを成立させる言語環境の工夫

協働的・双方向的な学びを充実させるためには、学びの基礎となる様々な言語環境の工夫が必要である。話し合い活動で使用する言葉を教室に掲示して、いつでも活用できるようにしたり（図4）、言葉を豊かにするために分からない言葉はこまめに辞書を引かせるようにしたり（図5）、読書活動に力を入れて積極的に読み聞かせをしたりといった手立てを実践した。



図4 話し名人



図5 辞書の活用

また、教員が「何でも話せて、お互いを認め合えるクラスづくり」を意識的に進めることも重要である。だれでも安心して答えられる発問を行ったり、どんな意見も受け入れることを確認したりすることで、児童の学び合う力は育っていくと考え実践した。

イ 実践①「書くこと」の指導

(ア) 実践の概要

6月に「書くこと」の領域で、協働的・双方向的な学びを取り入れた実践を行った。単元名は、「調べたことを『記号ブック』にまとめて報告しよう」で、集めた記号を特徴ごとに整理して「記号ブック」にまとめ、グループで交流するという学習である。

今回の実践では、単元構想を立てる際に、2種類の協働的・双方向的な学びを取り入れた。4人グループを作って個々に取材してきた記号カードの特徴を見付けながら分類する話し合い活動（第5時）と、8人グループで作成した記号ブックの内容を発表し合い、意見や感想を付箋に書いて交流する活動（第10時）である（図6）。付けたい力と学習形態を意識して実践を進めた。

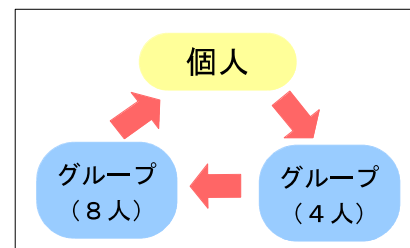


図6 学習の流れ（事例①）

(イ) 実践後の考察

第5時の授業の目標は、「記号を分類する観点を認識して整理するとともに、報告したい内容を決める」で、合意形成が学習の目指す方向であった。1グループが4人で形成されていたことで、活発な話し合い活動が展開された（図7）。話し合い活動で学びが終わるのではなく、話し合いの結果をワークシートに書くことで、個々の再構築された考えがワークシートに集約された。また、ワークシートの記述内容は、付けたい力を確認するための評価にも生かすことができた。合意形成を目指した話し合い活動の場合、話し合いの結果をワークシートに整理して可視化することによって、児童が意欲的に学習に取り組む姿が見られた。



図7 合意形成を目指した4人の活動（第5時）

第10時の授業の目標は、「記号ブックを読み合い、報告した内容について意見や感想を述べ合う」であり、相互理解が学習の目指す方向となった。2回目に行ったグループ学習は4人から8人に人数が増え、多様な意見を交流し合う活動が展開された（図8）。児童も交流を通して多様な意見を聞くことができたため、本時の目標を達成するために適した学習形態であったと推察する。



図8 相互理解を目指した8人の活動（第10時）

今回の実践を通して、グループ間で話し合い活動の様子に違いが見られた。円滑に話し合いが行われているグループもあれば、話し合いがすぐに終わり、内容を十分深めることができなかったグループもあった。話し合いを活発に進めるための手立てや児童の能力差を埋めることができる言語活動について更なる研究の必要性を感じた。

(ウ) 質問紙調査の分析

実践後に事前調査（5月）と同じ内容の質問紙調査を行った。すると、34項目の内、32項目において肯定的な回答の占める割合が事前調査に比べて大きくなった（資料1参照）。「学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しい。（逆転項目）」に19.9ポイント、「勉強のことでは、友達から頼られていると思う。」に17.1ポイント、「問題の解き方はいくつか考えることにしている。」に22.8ポイントの増加が見られた。このことより、協働的・双方向的な学びが、児童の自己有用感を高めたり思考や判断を促す働きがあると推察された。

ウ 実践②「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の指導

(ウ) 実践の概要

10月に「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」について、協働的・双方向的な学びを取り入れた実践を行った。今回は6月の実践での課題を踏まえ、協働的・双方向的な学びが効果的に働く言語活動は何かを考え、「句会を開いて、大好きな俳句を伝える」という言語活動を選定した。単元計画の中に「句会」という言語活動を意図的に設定することで、「個人→グループ→学級→個人」という学習の流れが生まれた（図9）。「句を詠む」という個人内で完結する学びが、どのように深まり広がるかに着目して実践を進めた。

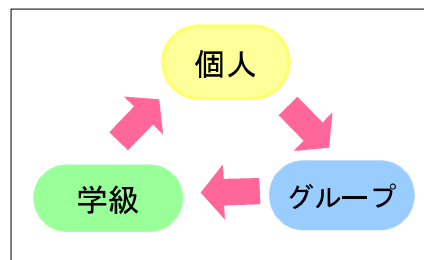


図9 学習の流れ（事例②）

(ウ) 指導計画

- ① 単元名 句会を開いて、大好きな俳句を伝えよう
- ② 教材名 声に出して楽しもう（光村図書・3年下）
- ③ 単元の見どころ

<ul style="list-style-type: none"> ・身近なことを題材に俳句をつくり、それらの中から自分の好きな俳句を選び親しむ。 ・俳句を読むことを通して、情景を思い浮かべたり五・七・五のリズムを感じ取ったりすることができる。

④ 協働的・双方向的な学びを位置付けた単元の指導計画（全3時間）

次	時	学 習 活 動	協働的・双方向的な学び
一	1	「句を鑑賞しよう」 ・小林一茶や与謝蕪村などの俳句を読み、感想を述べる。 ・自分の気に入った句を選んで視写し、気に入った理由を書く。 ・気に入った句について、交流する。	→ 4人のグループで気に入った句を伝え合う。
	2	「句を詠もう」 ・「秋」「社会見学」に関する言葉を集め、五七五のリズムになるよう句を考える。 ・詠んだ句の中から一句を選び、短冊に書く。	
	3	「句会をしよう」 ・友達の句を読んでワークシートに写し、鑑賞する。 ・気に入った句の一つを選び、その理由を書く。 ・グループの友達に、気に入った句とその理由を発表する。 ・グループで、「おすすめの一句」を決めるために話し合う。 ・グループの代表が、全体に「おすすめの一句」とその理由を伝える。 ・「おすすめの一句」の中から気に入った句に投票し、クラスの一句を決める。	→ 4人のグループで「おすすめの一句」を決めるために話し合う。 代表が、「おすすめの一句」を伝える。【指導略案】

⑤ 指導略案（第3時）

○本時の目標 句会を通して自分が選んだ好きな俳句を伝え合い、俳句に親しむことができる。

○本時の学習

学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法 ○準備物
1. 本時のめあてを確認する。 2. 短冊に書かれた友達の句を読み、ワークシートに写して鑑賞する。 3. 自分の気に入った句を一つ選び、その理由を書く。 4. グループの友達に、自分の気に入った句とその理由も発表する。 5. グループで、「おすすめの一句」を決めるために話し合う。 6. グループの代表が「おすすめの一句」とその理由を全体に伝える。 7. 各グループの「おすすめの一句」の中から、気に入った句に投票し、「クラスの一句」を決める。 8. 本時を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習計画表を使って、めあてと学習内容を確認させる。 ・選んだ理由が具体的に書けるように、「どの言葉がいいのか」「どんなイメージをもったか」等の観点を提示する。 ・机間指導をして、全員が選んだ理由が書けているか確認する。 ・多数決ではなく、選んだ理由をよく聞いて考えるよう促す。 ・司会の児童を支援するためのカードを準備する。 ・句会が終わった後は、全員の句を掲示し、自由に読み合うことができるようにする。 	○学習計画表 ○句を書いた短冊 ○ワークシート [関] 句会を通して自分が選んだ好きな俳句を伝え合い、俳句に親しむことができる。(グループでの発表の様子やワークシートの記述内容を基に評価する。) ○司会者カード

(ウ) 実践後の考察

第3時では、「グループの中」と「個人と学級」という二つのスタイルの協働的・双方向的な学びが展開された。「句会」は、協働的・双方向的な学びを含む言語活動であり、それを意図的に単元構想に入れることで、児童は相手意識や目的意識をはっきりともって学習活動に臨めた。句を詠む「一人学習」の場面では、句会で友達に読んでもらうために意欲的に句を詠んだり、どの句を句会に出すか主体的に思考して選んだりする姿が見られた。4人グループで「おすすめの一句」を選ぶ場面では、先に自分の意見をワークシートに記入していたことで、児童は、グループの中で自信をもって意見を発言することができた。自分と同じ句を選んだ児童の意見に共感したり、違う意見を聞くことで新たな見方に気付いたりしていた。協働的な学びを通して、児童の俳句に対する見方が広がったことが実感できた。また授業では、話し合い活動が活発に進むように、司会の進め方を具体的に示した「司会者カード」を準備したことも効果があった(図10)。このカードを手がかりにしながら話し合いが進められ、どのグループも「おすすめの一句」を選ぶことができた。最後に学級全体で「クラスの一句」を決める場面では、一人一人が決定に関わるという当事者意識が働いた(図11)。選ばれた俳句を比較することで、児童は主体的に学習に取り組むことができた。様々な俳句に触れたことが最終的に個人に返り、一人一人が俳句に親しむことにつながったと推察する。

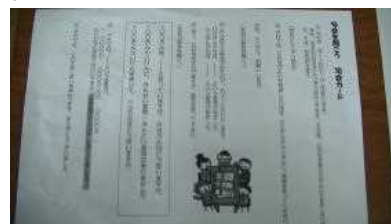


図10 司会者カード



図11 一人一人の投票で選んだ「クラスの一句」

(I) 質問紙調査の分析

実践後に前回と同じ質問紙調査を行った結果、1回目と比較して34項目中32項目において肯定的な回答の占める割合が大きかった。また、「自分のすることや言うことに自信をもっている。」が20.1ポイント、「普段の授業では、自分の考えを発表する場面がある。」が17.1ポイント増えた。特に、「国語の勉強は好きだ。」に関しては、23.0ポイントの目立った増加が見られた。

今回の実践では、協働的・双方向的な学びの中で、俳句を詠む（個人）、おすすめの俳句を選びその理由を伝える（グループ）、クラスの一句を選ぶ（学級全体）といった児童の意見が可視化される場面が多く見られた。協働的・双方向的な学びにおいては、一人一人の学習目的が明確で、個人の意見が学級全体の学びに反映されることで、児童の学習意欲が高まるのではないかと推察する。「句会」が付けたい力に最適な言語活動であったことと、協働的・双方向的な学びを取り入れたことが、個人内で完結する学びにならずに有効に働いたと考えられる。

エ 実践③「話すこと・聞くこと」の指導

(7) 実践の概要

12月には、「話すこと・聞くこと」の領域で、協働的・双方向的な学びを取り入れた実践を行った。今回は、「3年生の学習を2年生に伝える」という言語活動を設定した。「学級の友達」と「2年生」という異なる対象との協働的・双方向的な学びを単元構想の中に計画した（図12）。グループ練習では、タブレットPCを使った学び合いにも取り組んだ。

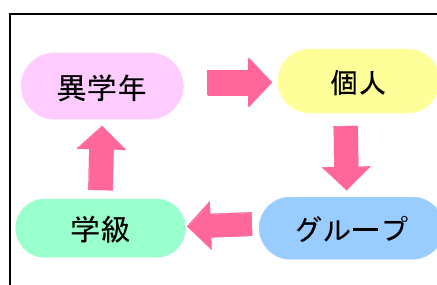


図12 学習の流れ（事例③）

(4) 指導計画

- ① 単元名 3年生の学習について、発表会で2年生に伝えよう
- ② 教材名 わたしたちの学校行事（光村図書・3年上）
- ③ 単元の目標

- ・3年生の学習について、よりよく伝わるように話し方を工夫している。
- ・3年生の学習内容について伝えるために、理由や事例などを挙げながら丁寧な言葉で話すことができる。
- ・相手を見たり、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意をしたりして話すことができる。
- ・言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くことができる。

④ 協働的・双方向的な学びを位置付けた単元の指導計画（全10時間）

次	時	学 習 活 動	協働的・双方向的な学び
一	1	・3年生になり初めて取り組んだことや、2年生と変わったところを思い出す。 ・めあて「3年生の学習や活動を伝えよう」を知る。 ・教師作成によるモデルビデオを見て、発表のイメージをつかむ。	
二	2	・1グループ1教科を担当するように分担を決める。 →	1グループ4～5人で担当する教科を決める。
	3	・「はじめ・中①・中②・中③・おわり」という発表の形式を知る。 ・担当する教科で2年生に何を伝えたいかを考え、ノートに意見を書く。	
	4	・話し合いのモデルビデオを見て、よい話し合いの仕方を考える。 ・話し合いの司会者を決め、発表の「中」で何を伝えるか話し合う。 →	グループで発表の中身を検討する。
	5	・グループの中の担当を決める。 ・自分の担当する内容をどう話すか、メモに書いて考える。	
	6	・何度も声に出して話す練習をする。 ・発表メモを基に、グループで発表の練習をする。 →	グループで発表の練習をし、改善点について交流する。【指導略案】
三	9		グループごとに2年生に発表する。
	10	・2年生のクラスで、3年生の学習や活動を発表する。 →	

⑤指導略案（第7時）

○本時の目標 グループで発表の練習をすることを通して、姿勢、目線、表情、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意して話すことができる。

○本時の学習

学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法 ○準備物
1. 学習内容と目的を確認し、本時のめあてを知る。	・学習計画表を使って確認させる。	○学習計画表 ○掲示カード
発表名人になろう		
2. 発表名人になるには、どうすればよいかを考える。 はっきりした声 笑顔 良い姿勢 聞きやすい速さ	・児童の意見を基に、発表にあたり留意するポイントを示す。	
3. 2グループで順番に発表を行い、発表名人になれているかどうかアドバイスし合う。	・後で確認できるように、発表の様子をタブレットPCで撮影するよう伝える。	○タブレットPC 8台
4. タブレットPCの映像を見て、自分の発表の様子を振り返り、記録する。	・振り返りの観点をはっきりさせるため、ワークシートに記入させる。	○振り返りカード 【話聞ウ】グループでの発表の練習を通して、姿勢や抑揚、強弱、間の取り方に注意して話そうとしている。（タブレットPCの記録データや振り返りカードの記述内容を基に評価する。）

(ウ) 実践後の考察

第7時では、2組のグループで、お互いの練習を交流する活動を行った。付きたい力が「姿勢、目線、表情、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意して話すこと」であったため、タブレットPCを使ってお互いの発表の様子を録画し、改善点を見つけ出すための参考とした（図13）。振り返り活動は2回行った。1回目は、片方のグループから直接改善点を伝えてもらい、2回目は、4人グループでタブレットPCの

再生映像を確認して自ら改善点を見付けた（図14）。グループの練習でタブレットPCを使用したことは、相手意識を高めたり、客観的に改善点を見付けたりするために有効であった。また、



図13 発表の様子を録画 図14 録画した映像を確認

記録した映像は、教員が「話すこと・聞くこと」の評価をする場合にも活用することができた。このように、ICT機器を授業で活用する場合、付きたい力や協働的・双方向的な学びとの関連を明確にして実施することが重要であることが分かった。

第10時には、2年生に3年生の学習内容を発表する活動を行った（図15）。「2年生のために伝える」という明確な相手意識・目的意識があることで学習に対する児童の意欲が高まったといえる。一人一人の特性を生かしながら、4人で役割分担をして発表したことで、どの児童も活躍できる場が設定され、個人の自己有用感を高めることができたようだ。



図15 2年生への発表会

実践後の感想からは、「みんなで発表などを聞き合うことで、人の気持ちになれるし、いい所などがあったら参考にできた。」「グループ学習は、教え合ったり相談できたりするから4年生になってもやりたい。」等、グループ学習に前向きな内容を多数見ることができた。

3 成果と課題

(1) 授業実践からの考察

三つの実践を通して、国語科における協働的・双方向的な学びについて明らかになった点を以下のように整理した。

ア 協働的・双方向的な学びと国語科で付けたい力について

協働的・双方向的な学びを進めるには、単元で付けたい力を教員が明確に意識しておくことの大切さを改めて確認できた。国語科では、付けたい力に最適の言語活動を選択して単元を貫いて取り組んでいくことが重要で、選択した言語活動と協働的・双方向的な学びを適切に関連させることで、付けたい力を確実に付けさせることができることが分かった。今回の実践では、特に「句会」という言語活動において、協働的・双方向的な学びが有効に働いたといえる。学び合いにより児童一人一人の読みが深まり、結果として俳句に親しむという単元目標が達成されたからである。付けたい力と言語活動、協働的・双方向的な学びの三つが有機的に関連できた実践であった。

イ 協働的・双方向的な学びと学習形態について

国語科における協働的・双方向的な学びは、大きく分けて二つの方向性が考えられる。一つは、課題を解決するために、話し合い活動を通して答えを作り上げていく合意形成。もう一つは、多様な考えを交流することによって、自分自身の意見を深化拡充させる相互理解である。学びのゴールがどちらに向いているのかによって、学習形態が決定される。さらに、グループ学習による学習意欲の持続、ペア学習による学習内容の確認等、学習形態と学習目的を的確に対応させていくことが重要であり、これが、付けたい力を確実に付けるための有効な手立てとなる。

しかし、複数で学ぶことによって、「だれかがやってくれる」といった甘えが生まれることも懸念される。今回の実践では、協働的・双方向的な学びを確実に進めるには、児童一人一人にはっきりとした目的意識や当事者意識をもたせ、学びの成果が可視化できる手立てを行うことが大切であることが分かった。

ウ 協働的・双方向的な学びと単元構想について

協働的・双方向的な学びは、毎時間設定する必要はなく、45分の授業の中にどれだけの時間取り入れるかについても検討が必要であることが再認識できた。また、グループ学習にいたるまでに、個人の意見を整理する準備時間を取ることが大切であり、一人一人が意見をもってグループ学習に臨むことが、協働的・双方向的な学びの成功条件となることが分かった。話し合いの中身を次の学習場面で報告する義務がある場合、その話し合いはより活発になった。「2年生に3年生の学習内容を伝える」実践では、グループから学級、学級から異学年へと展開する単元を構想したが、それぞれの話し合いの中身が次の学習に生かすことにつながり、協働的・双方向的な学びが効果的に働いた実践であったといえる。

(2) 児童の変容

1学期は、教師対児童のやりとりが多かったが、2学期からは一人の児童の発言に対して他の児童がつぶやいたり、他の児童と違う意見を発表したりと児童同士のやりとりの回数が多くなった。また、「自分の意見が言いたい」「みんなの意見を聞きたい」という要望が増え、学級のほとんどの児童が進んで発言するようになったこともプラスの変化であった。その他に、理科や社会といった国語科以外の授業でも、課題を解決したり考えをまとめたりするといった協働的・双方向的な学びが展開されたとようになった。

以下、実践によって特に変化が見られた児童の様子について述べる。

【A児の変化】

1学期のA児は、ノートに自分の意見を書く活動はできていたものの、学級の中で挙手して発表をする機会は少なかった。グループ学習の際も、必要以上のことは話さず、比較的友達の意見を聞いている姿が多く見られた。2学期の俳句の学習では、自分の句を選んでもらったことを喜び、自信がついた様子であった。その後、グループ学習等で、積極的に意見を述べる姿が増えた。12月、2年生への発表内容を考える際には、「ポートボールを説明するために、実際にやってみせたい。」とアイデアを出し、隣のグループにも声をかけて実演してみせた。また練習の時も、実演する友達の動きを確認し、協力して練習をしていた。グループ学習での発言が増えてから、学級全体での自信をもった発言が増えた。事後の質問紙調査では、「とてもそう思う」と回答した数が事前の6項目から19項目に増え、国語に対する学習意欲が高まったことを見取ることができた。

【B児の変化】

B児は、学習全般において理解が難しく、「どうせ私はできへんもん。」と初めから諦めてしまうところがあった。「無理」「めんどくさい」がB児の口癖で、自分の発表の順番がきても自信がなく、「恥ずかしい。」と言ってなかなか話すことができなかった。初めは、課題に対する個人の意見を書くことにも時間がかかっていたが、手元に発言内容が書かれたメモを作ったことで、グループ学習の際には意見を言うことができた。2学期に入り、全体学習やグループ学習に慣れてくると、「私にも言わせてよ!」と積極的に自分の意見を発言しようとしたり、「司会やりたい。でもできるかな。」と不安な様子も見せながらも、句会の司会にチャレンジしたりする姿が見られた。事前と事後の質問紙調査を比べると、「とてもそう思う」の回答が6項目から19項目に増え、「まったく思わない」の回答が19項目から1項目に減った。国語に対する学習意欲が高まったと推察される。

(3) 質問紙調査の分析

12月に4回目の質問紙調査を行った。肯定的な回答をした児童の割合に着目して見ると、1回目の調査より割合が大きくなった項目は、34項目中30項目に上った。その内、「国語の勉強は好きだ。」は11.6ポイント、「国語の勉強は大切だ。」は14.3ポイント上昇した。また、事前の調査では、他の質問項目と比べて肯定的な回答の割合が小さかった項目について見てみると、「勉強のことでは、友達から頼られていると思う。」が31.4ポイント、「自分のすることや言うことに自信をもっている。」が22.9ポイント増え、20ポイント以上の変化が見られた。

肯定的な回答の割合の比較では、概ね4回目の質問紙調査の方が割合の値が上

表1 肯定的な回答の割合の比較

(%)

質問項目	第1回調査 (5月)	第4回調査 (12月)
1 面白いと思うことやもっと知りたいと思うことは、とことん調べたい。	91.5	85.7
2 人の役に立てるような立派な人間になりたい。	91.4	100.0
3 わからないことはとことん調べている。	82.8	88.5
4 自分から勉強に取り組んでいる。	77.1	85.7
5 難しい問題に出会うとよりやる気が出る。	68.6	80.0
6 問題の解き方はいくつか考えることにしている。	65.7	97.1
7 一人で解決できることは、できるだけ一人で解決している。	74.3	91.4
8 新しいことを学ぶことは面白いと思わない。(逆転項目)	88.6	85.8
9 友達に質問されても、ほとんどのことはうまく答えられる。	80.0	94.3
10 授業でわからないことがあると、先生に質問できる。	65.8	82.9
11 わからないと思うことは、わかるまで調べている。	82.9	91.5
12 自分も持っている力を十分に出しきりたい。	77.2	94.3
13 面白いと思うことやもっと知りたいと思うことは、調べずにはいられない。	74.3	88.6
14 テストがあれば、自分で計画を立てて勉強する。	65.7	77.2
15 今までより、難しい問題に取り組むことが多い。	71.5	88.6
16 学校で勉強したことが正しいかどうか、家に帰ってもう一度考えてみる。	40.0	74.3
17 難しい問題に出会っても、簡単には先生や友達の助けは求めない。	80.0	85.8
18 学ぶことは面白いと思う。	80.0	94.3
19 勉強ことでは、友達から頼られていると思う。	40.0	71.4
20 授業でわからないことがあると、クラスの友達にきくことができる。	80.0	94.3
21 学校で教えてくれること以外でも、いろいろなことを学びたい。	80.0	91.4
22 いろいろなことを学ぶことは楽しい。	77.2	94.3
23 学校では落ち着いて授業を受けている。	88.5	77.2
24 友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意だ。	68.5	82.8
25 自分のすることや言うことに自信をもっている。	65.7	88.6
26 友だちに伝えたいことをうまく伝えることができる。	77.1	91.4
27 友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができる。	85.7	97.2
28 普段の授業では、本やインターネットを使ってグループで調べる活動をよく行っている。	65.7	82.9
29 普段の授業では、自分の考えを発表する場面がある。	74.3	91.5
30 普段の授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っている。	88.6	88.6
31 学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しい。(逆転項目)	45.8	51.4
32 国語の勉強は好きだ。	74.2	85.8
33 国語の勉強は大切だ。	80.0	94.3
34 国語の授業で自分の考えを書くと、考えの理由がわかるように気を付けて書いている。	88.6	91.4

昇したという結果を得られたが、今回の実践と児童の学習意欲との関係を調べるため、事前の質問紙調査で肯定的な回答の割合が他の項目に比べて小さかった項目と、学習意欲や話し合い活動に関する項目とを含めた計7項目間で相関分析を行い、ピアソンの積率相関係数を算出した。各質問項目について得点化を行ったが、その際、それぞれの回答について、「とてもそう思う」を4点、「どちらかといえばそう思う」を3点、「どちらかといえばそう思わない」を2点、「まったく思わない」を1点とし、統計的処理を行った（表2）。

表2 質問項目（抜粋）間の相関

上段：第1回調査(5月)の結果
下段：第4回調査(12月)の結果

	項目1	項目5	項目6	項目19	項目24	項目25	項目30
1 面白いと思うことやもっと知りたいと思うことは、とことん調べたい。	1.000	0.331	0.308	0.505**	0.106	0.202	0.257
	1.000	0.610**	0.660**	0.517**	0.526**	0.406*	0.598**
5 難しい問題に出会うとよりやる気が出る。	0.331	1.000	0.547**	0.388*	0.205	0.413*	0.312
	0.610**	1.000	0.626**	0.531**	0.412*	0.276	0.173
6 問題の解き方はいくつか考えることにしている。	0.308	0.547**	1.000	0.263	0.154	0.439**	0.487**
	0.660**	0.626**	1.000	0.468**	0.514**	0.335*	0.551**
19 勉強のことでは、友達から頼られていると思う。	0.505**	0.388*	0.263	1.000	0.202	0.159	0.425*
	0.517**	0.531**	0.468**	1.000	0.546**	0.335*	0.450**
24 友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意だ。	0.106	0.205	0.154	0.202	1.000	0.630**	0.158
	0.526**	0.412*	0.514**	0.546**	1.000	0.713**	0.356*
25 自分のすることや言うことに自信をもっている。	0.202	0.413*	0.439**	0.159	0.630**	1.000	0.285
	0.406*	0.276	0.335*	0.335*	0.713**	1.000	0.223
30 普段の授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っている。	0.257	0.312	0.487**	0.425*	0.158	0.285	1.000
	0.598**	0.173	0.551**	0.450**	0.356*	0.223	1.000

※ 表中の数値は、ピアソンの積率相関係数を表す。**の付く相関係数は1%水準で有意(両側)、*の付く相関係数は5%水準で有意(両側)であることを示している。

「1 面白いと思うことやもっと知りたいと思うことは、とことん調べたい。」と他の6項目との間の相関を見ると、すべてにおいて、事前より事後の方が相関係数の数値が上昇した。事後では、5項目において中程度の有意な相関が見られるようになった。

「19 勉強のことでは、友達から頼られていると思う。」については、「6 問題の解き方はいくつか考えることにしている。」や「24 友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意だ。」との間において、どちらとも事前には有意な相関が見られなかったが、事後では中程度の有意な相関が見られるようになった。今回の実践によって、児童の有能感が刺激され、学習に対する意欲や発表することへの自信との関係が強まったことが示唆される。

次に、「30 普段の授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っている。」と「6 問題の解き方はいくつか考えることにしている。」との相関を確認した。事前事後共に、中程度の有意な相関が見られ、事後の方が相関係数の数値が上昇していた。話し合い活動と児童の深い思考の間には相関が見られ、協働的・双方向的な学びを通して、二つの項目間の関係がより強まったことが示唆される。

表1に見られるように、質問項目に対する肯定的な回答の割合が上昇したことや、表2に見られるように、課題とした質問項目間の相関が強まったことから、付けたい力に最適な言語活動を選択し、協働的・双方向的な学びを単元構想の中に意図的・計画的に位置付けた授業を展開するという今回の取組は、児童の学習意欲を高めるために効果があったと考える。

(4) 今後の課題

今回の研究では、実践後の児童の変化や質問紙調査の分析等により、協働的・双方向的な学びを単元構想の中に意図的・計画的に位置付けることで児童の学習意欲が上がるということが確認できた。実践を進めた結果、以下に示す3点が今後の課題として指摘できる。

1点目は、協働的・双方向的な学びの系統的な指導である。3年生という発達段階は、協働的・双方向的な学びを成立させるための土台となる言語能力を身に付けている過程である。「理由や事例を挙げながら説明する力」「相手の話を聞き、質問する力」「進行に沿って話し合う力」等の言語能力は、次の学年でも繰り返し鍛える必要がある。それによって、協働的・双方向的な学びが効果的に進められ、国語科で付きたい力を確実に身に付けていくことができるのではないかと推察する。

2点目は、教材の更なる素材研究の必要性である。合意形成を学習のゴールとする話し合い活動の場合、児童の思考が深まる価値のある課題の設定が重要であり、どんな課題を設定すべきか深く研究する余地がある。交流によって多様な考えが生まれる課題は、個人の考えを深め広げることができる課題である。教員は、価値のある課題を見付けるべく、協働的・双方向的な学びをはじめとする指導方法の研究と同様に、教材そのものの素材研究にも努めなければならない。指導研究と素材研究が車の両輪となることで、国語科の学習研究は推進されるであろう。

3点目は、他教科等への活用である。指導要領にあるように、国語科で培った言語能力を他教科等でも活用し、言語活動の充実を図ることが大切である。今回の研究では、児童の実態から、国語科で実践を進めた協働的・双方向的な学びが、理科や社会科等で活用されている様子が見えたと考えた。今後この研究の成果を基に、教科等を横断した協働的・双方向的な学びの更なる実践研究を進めていきたいと考える。

参考文献

- (1) 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領』
- (2) 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説 総則編』東洋館出版社
- (3) 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社
- (4) 文部科学省(2011)『言語活動の充実に関する指導事例集 ～思考力・判断力・表現力等の育成に向けて～【小学校版】』教育出版
- (5) 水戸部修治(2013)『単元を貫く言語活動のすべてが分かる！小学校国語科授業&評価パーフェクトガイド』明治図書
- (6) 文部科学省(2013)「初等教育資料(No. 899)」東洋館出版社
- (7) 文部科学省(2013)「初等教育資料(No. 901)」東洋館出版社
- (8) 花田修一、小森茂、水戸部修治、松木正子編(2013)「実践国語研究320号」明治図書
- (9) 水戸部修治・福岡教育大学附属久留米小学校(2012)『「協働的学び合い」をつくる言語活動－教科の特質をふまえた授業づくり－』明治図書
- (10) 石川普、佐内信之、阿部隆幸編『協同学習でどの子どもも輝く学級をつくる』(2013)学事出版
- (11) 独立行政法人教員研修センター(2010)「言語活動の充実を図る全体計画と授業の工夫」
- (12) 国立教育政策研究所(2011)『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校 国語】』教育出版
- (13) 北九州国語教育研究会『小学校国語科単元を貫く言語活動の授業展開』(2013)東洋館出版社